

日本労働年鑑 第54集 1984年版
The Labour Year Book of Japan 1984

第二部 労働運動

XII 政治的大衆行動と平和運動

2 原水爆禁止運動

原水爆禁止一九八二年世界大会

八二年の原水爆禁止世界大会は、八月一日から八日まで、東京の国際会議(一～二日)、八二年世界大会・広島(五～六日)、長崎のひろば(八日)という日程で開催された。

八月一～二日にひらかれた東京での国際会議には、来賓の国連事務総長補特別補佐官のプロボスラフ・ダヴィニッチ氏をはじめ、海外から三四カ国・地域と一三の国際組織の代表一〇〇人をふくめ七〇〇人が参加した。八月一日午前一〇時から日本教育会館でひらかれた開会総会では、日本原水協草野信男理事長の開会のあいさつ、榎枝元文総評議長の議長団代表あいさつにつづいて、中林貞男生協連会長による主催者報告がおこなわれた。さらに、来賓のダヴィニッチ氏、日本山妙法寺藤井日達山主のあいさつのあと、一八人の海外代表と四人の国内代表が問題提起と運動の報告をおこなった。一日午後から二日の午後にかけて、国際会議では、大会課題にもとづく四つの分科会((1)第二回国連軍縮特別総会の結果と核兵器完全禁止のために、(2)核兵器使用の非人道性、被爆者援護、起こりうべき核戦争の被害、(3)平和、軍縮、生存、環境、新国際経済秩序にむけての教育、メディア、文化、芸術、科学などの発展のために、(4)原子力開発と核拡散の諸問題をめぐって)で討議がおこなわれたのち、午後六時より東京集会・国際会議閉会総会が開催され、分科会報告につづいて「東京宣言」が採択された。

【東京宣言(要旨)】

原水爆禁止一九八二年世界大会東京国際会議は、活発な討議を展開して、以下の諸点に合意した。

一、われわれは、核軍拡競争をただちに停止し、逆転させるよう厳粛に要求する。

二、人類最初の核戦争である広島・長崎および核兵器、生物兵器および化学兵器の開発に伴う被害は、全ての国の為政者・軍人・市民に周知徹底されるべきである。われわれは、核兵器の使用と開発による被害者は、関係当事国政府の手によって十分に援護されるべきであると確信する。とくに、被爆者援護法は日本政府の手で速やかに制定されるべきである。

三、核兵器完全禁止を最優先課題とする、時間枠をかけた拘束力のある包括的な軍縮計画は、遅滞なくただちに策定され、実行に移されなければならない。

四、非核地帯を、アジア、太平洋、インド洋、アフリカ、中東、地中海、バルカン、ヨーロッパ、スカンジナビア、北・中央および南アメリカ、オセアニアなど、世界いたるところに広げ、究極的に地球を非核化しなければならない。この方向に合致する村、町、都市、地域を非核化するための活動が奨励されるべきである。

五、いかなる軍事ブロックと軍事同盟も、その解消にむけて関係諸国が責任ある具体的一歩を踏み出すべきことを強く要求する。この目的にむけて、諸国政府は、各国人民

の支持のもとに一方的なイニシアティブを発揮すべきである。

六、国際間の紛争解決を軍事的手段に訴えることはもとより、軍事費や武器移転を抜本的に削減すべきことを要求する。

七、我々は抑圧と核の脅威のない世界をもとめる運動を第三世界の人民の運動と連帯させて発展させるべきである。

八、我々は、世界各地で広島・長崎の被爆の実相を普及するなど、反核・軍縮の諸活動をひき続き圧倒的に高揚させるよう、いっそうの創意と工夫努力を傾ける。

九、核燃料サイクルと核兵器拡散との間の相互関連を認め、軍事利用に反対する。

十、われわれは、現代の軍事化政策に反対するだけでなく、平和運動において、地球およびその生物との調和、すべての人民の平等と権利の尊重を反映した新しい価値観や生活様式および技術を、先頭に立って創り出さねばならない。

十一、われわれは、政府の行為と人民の行為とをはっきり区別する。われわれは、軍縮の実現に必要な諸措置をとるうえで、運動が政府に訴え、圧力をかけるべきであると信ずる。

われわれは、世界各国政府に以下のことを訴える。

(1)核兵器の先行不使用を誓約すること。(2)全世界に非核地帯をひろげること。(3)一方的軍縮のイニシアティブをとること。(4)すべての核実験を終わらせること、核兵器その他の大量破壊兵器の実験、生産、配備、を即時凍結し、全面軍縮への第一歩とすること。

軍縮への道の一環として、われわれは世界各国人民に失業、貧困、病気、無知に反対するキャンペーンを起こすよう呼びかける。

今や、反核・軍縮・平和は時の声となっている。核戦争はもうたくさんだ。この課題を遂行する主たる責任は、我々人民の肩にかかっている。我々の様々なイニシアティブを通じて、我々は各国政府に軍縮を行わせることができるしまた必ずやそれを実現するであろう。

古いも若きも、男も女も、今こそ、ノーモア核戦争、ノーモア戦争、ノーモア核兵器、ノーモア・ヒバクシャ

一九八二年八月二日

原水爆禁止一九八二年世界大会東京国際会議

原水爆禁止一九八二年世界大会・広島は、八月五日午後四時、平和公園から中央公園までの「折り鶴平和行進」ではじまった。五時三〇分すぎから中央公園でひらかれた世界大会には、三一カ国・地域、一〇国際組織、八八人の海外代表をふくむ約三万人が参加。冒頭、原爆犠牲者を悼んで一分間の黙とうをおこなったのち、森滝市郎世界大会準備委員会代表が開会のあいさつ。つづいて、広島県実行委員会を代表して今堀誠二広島女子大学長が主催者あいさつを述べ、P・ダヴィニッチ氏が来賓のあいさつをおこなった。竹下広島県知事、荒木広島市長のメッセージが代読されたあと、大友よふ地婦連会長より世界大会主催者報告がなされた。このあと、国際会議の報告ののち、フォーク・ソングや詩の朗読、ダイ・インなどをはさみつつ、海外代表や被爆者の訴えがつついた。集会は最後に非核地帯の設置など一〇項目の要求をもちこんだ「ヒロシマ・アピール」を採択して閉会した。

世界大会二日目の八月六日、市主催の慰霊式典のあと、市内二五会場で課題別・階層別集会在

開催。被爆(曝)の実相を語り広めるために、軍縮と核兵器完全禁止、草の根運動前進のためになど一二のテーマと、子ども、若者、婦人などの階層別のひろばに分かれて、午後三時三〇分まで討論と経験交流がつづけられた。

【ヒロシマ・アピール(一部省略)】

今日、ここ広島に集まったわたしたちは、八月二日の「東京宣言」をこのアピールと切りはなすことのできないものとして確認します。私たちは決意を新たに、日本国政府に、各国政府に、国連に、次のことを強く訴えます。

- 1 ヒロシマ・ナガサキの被害、核実験による被害、起こりうべき核戦争の被害の残虐さをより深く自覚し、その周知徹底をはかること。
- 2 関係各国政府は、すべてのヒバクシャに対する十分な援護措置を直ちに実施すること。とくに日本国政府は、被爆者援護法をすみやかに制度化すべきこと。
- 3 核兵器使用禁止条約と包括的核実験禁止条約をすみやかに締結すること。
- 4 非核地帯を世界各地につくること。
- 5 核兵器完全禁止を最優先課題とする包括的な軍縮計画を遅滞なく策定し、実行に移すこと。
- 6 世界各国からの外国核軍事基地の撤去を要求するとともに、新たなヒバクシャをつくる原因となる核軍事基地の受け入れを拒否すること。
- 7 核軍拡競争自体が発展途上国の貧困と抑圧を生み出していること、また核燃料サイクルと核兵器拡散との間に深い関係があることを確認し、その周知徹底をはかること。
- 8 放射線にさらされ、ウラン採掘や核実験によって追いたてられた先住民、放射性廃棄物汚染の犠牲となったすべての人びとなど、核サイクルのヒバクシャたちに連帯すること。
- 9 被爆国日本政府をはじめ各国政府は、核軍縮条約の締結や非核地帯の設置にむけて積極的にイニシアティブを発揮すること。
- 10 これらの要求を象徴するため、八月六日の広島の日、世界中の海や川や湖で灯ろうを流し、いのちの明りをとすこと。

日本のみなさん！ 全世界のみなさん！ 核戦争の危機の高まりと反核運動の高まりがきびしく競いあういまこそ、現世代に生まれたわたしたちが後に続く世代のために、一層力強く前進しようではありませんか。

一九八二年八月五日

原水爆禁止一九八二年世界大会・広島

原水禁世界大会長崎実行委員会が主催し、世界大会準備委員会が協賛した「長崎のひろば」は、水害のため変更になった長崎市公会堂で、八月八日、海外代表四五人をふくむ約三〇〇〇人が参加して開催された。集会では、中林貞男生協連会長が世界大会について報告し、翌八三年世界大会へのとりくみについても発言。海外代表をふくめ、各地代表の報告ののち会場インタビュー、山口仙二氏の被爆者の訴えがあった。最後に、集会は「限定核戦争の準備強行、戦域・戦術核兵器の配備に反対し、核兵器完全禁止を実現すること、いかなる状況であれ、核兵器の使用と使用の脅迫を国連憲章の侵犯と人類にたいする犯罪として禁止する協定を緊急に成立させること」など、八項目の要求を各国政府・国連に訴える「長崎から心をこめて——一九八二年長崎アピール——」を採択して閉会した。なお、「長崎アピール」全文は、八二年九月六日付『原水協通信』に掲載されている。

中国、原水禁世界大会に出席の意向

原水禁世界大会準備委員会は、中国にたいして毎年招待状を出してきたが、八二年八月五日付で、招待を感謝する初めての電報が届いた。さらに、一〇月八日、王炳南・中国人民対外友好協会会長は、「もつと早く招待状をいただければ、真剣に検討する」と、翌年以降の世界大会参加に前向

きの意向を明らかにした。

八三年六月二二日には、張香山・中日友好協会副会長も、訪中した市民運動活動家代表団(团长・中林生協連会長)に「中国としては、五人の代表団をオブザーバーとして世界大会に出席させる」と表明。六月三〇日、原水爆禁止一九八三年世界大会準備委員会が、中国の大会参加を了承し、一八年ぶりの中国の参加が正式に決まった。

被爆三七周年原水禁大会

原水禁国民会議の独自集会である被爆三七周年原水禁大会は、七月二九～三一日東京での国際連帯会議、八月四～六日広島大会、八月七～九日長崎大会という日程でとりくまれた。

大会は、二九日から総評会館で始まった国際連帯会議で幕を開けた。会議には海外代表二〇人をふくむ約一〇〇人が出席。森滝市郎代表委員の主催者代表あいさつののち、会議は、(1)核戦争を防ぐために、(2)太平洋の非核化のために、(3)社会の核軍事化を防ぐために何をすべきか、をテーマに二日間の討議をおこなった。三一日、会議は、一六項目にわたる諸行動を提起した「国際連帯会議宣言」を採択して閉会した。

八月四日、広島県立体育館でひらかれた「世界の被害者と連帯する集会」には、海外代表をふくむ七〇〇〇人が参加。主催者を代表して、石黒寅毅原水禁代表委員が「いかなる国の核にも反対だ。核と人類は共存できない」とあいさつ。つづいて、世界の核被害者を代表して日本(在日朝鮮人をふくむ)、米国、マーシャル、英国の代表四人が発言した。八月五日は、被爆者との交流や、「被爆者援護法をいかに制定するか」「放射性廃棄物の海洋投棄」「トライデント・トマホーク配備阻止」等の分科会での討議などの活動がとりくまれた。八月九日、長崎市国際体育館前の球技場で閉会総会が開催。主催者を代表して田口健二原水禁代表委員のあいさつののち、米のネバタ核実験に抗議する決議が採択され、関口和原水禁事務局長によって国際連帯会議と広島大会について報告がなされた。海外代表、総評、社会党、公明党代表の連帯あいさつ、「大会宣言」と「『むつ』廃船決議」採択、「一〇月を『反核行動月間』として多様な行動を集中的に展開する」等をもりこんだ「行動決議」の採択を経て、約一〇日間にわたった大会の全日程が終了した。

原水禁沖縄大会

八二年一〇月一三日、「反核・軍縮・平和のための沖縄総行動」をスローガンに、「被爆三七周年原水禁沖縄大会」が那覇市の労働福祉会館で開催された。集会には、本土代表の一三〇人をふくむ約六〇〇人が参加。福地曠昭・沖縄原水協理事長あいさつのとあと基調報告がなされた。翌一〇月一四日には県内四カ所で、被爆者援護の問題や平和教育のあり方等をテーマにした分科会で討議。三日目の一〇月一五日、米軍基地や核燃料再処理工場建設予定地候補の西表島を調査したあと、那覇市与儀公園で閉会集会を開催。「沖縄アピール」を採択して、市内をデモ行進した。

八二年世界大会決議実践日本原水協集会

原水協主催の独自集会である八二年世界大会決議実践日本原水協集会は、八月七日広島、八月八日長崎で開催された。八月七日、午前、一一の会場での分散討論会、九つの行動テーマに関する討論集会、広島市内一〇カ所での被爆者との交流、見真講堂での文化とうたごえのつどいや岩国基地調査抗議行動など多彩な行動がとりくまれたのち、午後からは、県立体育館で全体集会がひらかれた。これには、一〇カ国一国際組織二三人の海外代表をふくめ、六五〇〇人が参加。櫛田ふきさんの議長あいさつ、佐久間澄原水協代表委員の開会あいさつののち、参加者からの報

告、あいさつがつづいた。集会は、集会文書である「国連事務総長へのメッセージ」と「決議」を採択して閉会した。これにつづいて、八月八日、午後、長崎市四海楼で日本原水協長崎集会が開催され、長崎市一二番館では「平和のための草の根ひろば」がひらかれた。

核禁会議全国集会

八二年七月三〇日、広島市広島医師会館において、核禁会議(核兵器禁止・平和建設国民会議・磯村英一議長)全国集会が開催され、全国から約一〇〇〇人が参加した。集会では、磯村議長の主催者代表あいさつにつづいて、村上広島核禁議長、荒木広島市長、柄谷民社党総務局長がそれぞれあいさつ。基調報告、被爆者救援カンパ贈呈ののち、閉会にあたって、(1)国連軍縮センターの強化と核軍縮国際センターの早期設立、(2)平和思想のいっそうの普及と教育を徹底する、(3)核エネルギー平和利用のため、安全管理体制を強化し、国民合意形成のための世論喚起をおこなう、(4)核兵器の早期廃絶と被爆者援護を促進する——などを内容とする核禁アピールが採択された。

八三年三・一ビキニデー焼津集会

ビキニ環礁水爆実験被災二九周年八三年三・一ビキニデー焼津集会は、静岡県実行委員会の主催、原水爆禁止一九八三年世界大会準備委員会の協賛で、三月一日午後二時すぎから焼津市民センターで開催され、七〇〇人が参加した。集会では、原水禁静岡県民会議の鈴木正次代表常任委員、静岡大学学長の加藤一夫氏、世界大会準備委員会代表委員の大友よふ地婦連会長ら各界の代表があいさつ。故久保山氏夫人ずずさんのメッセージも紹介された。物理学者の小出昭一郎氏、国際問題研究家の陸井三郎氏の問題提起などのあと、「アピール」を採択。静岡県平和委員会望月誼三会長の閉会あいさつで、集会は幕を閉じた。

焼津集会に先立って、一日午後零時半から、久保山氏の眠る弘徳院で、日本宗教者平和協議会主催による墓前集会が開催され、約一〇〇〇人が参加。久保山ずずさん、福竜会員崎吉男会長も参列して、あいさつを述べた。参加者は久保山氏墓前に献花したあと、市民文化センターまで約二キロの市内をデモ行進した。

【三・一ビキニデー焼津集会のアピール(要旨)】

三十八年前、わたしたち日本国民が終戦をむかえたとき、国土は原爆と空襲と艦砲射撃によって廃墟と化していました。

二十九年前の三月一日、太平洋のビキニ環礁でおこなわれたアメリカの水爆実験による「死の灰」は、現代の核戦争の恐怖を、わたしたちに実感させました。

三たびの被爆体験をとおして、核兵器全面禁止と非核三原則を国是とするわたしたちの国民的合意はつちかわれたのです。「核戦争にたたかって勝つ」という核超大国の指導者に追従してこのねがいをないがしろにするようなことは、ゆるされません。にもかかわらず、いま、日本列島は、アメリカの核巡航ミサイル「トマホーク」や核空母などの前線基地にされ、核戦場とされる危険にさらされています。

みなさん、「不沈空母」の上に子どもたち孫たちの未来はありません。「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」という久保山愛吉さんの死の床からのさげびを、わたしたち一人ひとりがその胸に真剣に受けとめなおし、行動に立ちあがらなければならない、その時が訪れました。

来年は、原水爆禁止運動が国民運動に発展するきっかけとなったビキニ水爆被災の三十周年となります。

反核平和の運動と世論のうねりをいっそう発展させ、来年の三・一ビキニデーを迎えま

しょう。あらゆる核兵器の持ちこみに反対し、核戦争を阻止し核兵器全面禁止への道を
きりひらく先頭に立ちましょう。太平洋地域、欧米をはじめとする全世界のなかま
と国際連帯をつよめ、力をあわせて、子どもたち孫たちの未来と青く輝く地球を守りぬきま
しょう。

一九八三年三月一日 ビキニ環礁水爆実験被災二九周年

一九八三年三・一ビキニデー焼津集会

三・一ビキニデー日本原水協集会

一九八三年三・一ビキニデー日本原水協集会は、二月二十八日、三月一日の両日、静岡で開催された。

二月二十八日、静岡大学で三会場に分かれて開会集会が開催。ここでの原水協報告にもとづいて
五テーマによる分科会が八会場でおこなわれた。翌三月一日、静岡市民文化会館大ホールで会
体集会がもたれ、全国からの代表約一〇〇〇人が参加。議長団、来賓あいさつのち、前日の分
科会での討議の報告、各地での活動の報告がおこなわれ、全体集会決議を採択して、閉会した。
なお、決議全文は八三年四月六日付『原水協通信』に掲載されている。

日本労働年鑑 第54集 1984年版

発行 1983年11月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 ●

2001年8月28日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1984年版(第54集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
